

# STAGE-I サーチライト



『侵入者確認。警報システム作動。排除モード。』

警報が鳴ると、急に電源が切れ、室内は真っ暗になった。

すると急に激しいライトがリアの目をくらませ、巨大な蛇のようなものが、あっという間にリアを巻き取った。強烈な光が彼女の顔を照らす。

巻きついているものは、サーチライトだった。

「まいった…、動けない。こいつ離れないな…。」

筋力がケタ違いの機械の拘束を振りほどくことは出来なかった。

抵抗の甲斐なく、強烈に締め上げられる。

「く、ううっ…。」

機械は動けないようきつく拘束している一方で、股間部分には可動するよう弛みを持たせていた。そのあそびで、機械はリアの股間を摩擦し始める。

「！…悪趣味。」

ほかにも無数のサーチライトが現れ、その様子をじっと観ている。操縦者の裁量で排除する前に辱めようというのだろう。

擦り、擦り、擦り、すり…。

「くっ、ん、ちょっとマズいな…。」

特殊素材の伸縮性パワードスーツは体にびったり密着しており、摩擦による刺激は直に来る。また摩擦の強い素材なのでゴム製の触手との摩擦力は何倍にもなる。ひとつ擦り上げる度に断続的な強い刺激が股間を襲う。

一定のリズムで肛門から性器を擦り上げ、戻り、何度も往復する。

さすがのリアもこの強烈な接触に反応し始めていた。

「んっ…！このままじゃホントに…。しょうがない。」

リアはパワードスーツの機能を使う事にした。集中し、耳の装置に意識を送る。

## STAGE-II アリクイ型生物兵器



「ひ、ひええ〜っ! 許してクイ〜っ!」

スピードモードのリアに追い詰められた巨大なアリクイは  
地に頭を付け、必死に土下座をする。

「全く、あなた達にかまっている暇なんか…」

リアが脱出しようとした瞬間であった。

勢いよく地面から舌が飛び出し、一瞬でリアの膣内に侵入した。

「あつ…!!!?」

リアは突然胎内を搾られ、脱力してしまう。

その際に背後からも舌が現れ、最も敏感なアナルに侵入する。

「あひやああああつ!!!」

アリクイが顔を上げると、その舌は地面に入り込み、

リアの膣に繋がっていた。

「クキキ、ひっかかったクイ〜っ!」

「一歩も動くなクイ。動いたら子宮も内臓も、ぜ〜んぶ引っ張り出すクイよ?」

「くっ…! しまったっ…、あつ…!!!」

細長い舌は器用にリアの胎内を搾り、探る。



「ホラホラ、動いちゃダメイよ～？」

「あ、ああ、く…!!!」

舌は自由自在、器用にくねり、肉壁を擦る。

「どうイイ？ここが気持ちいいイイ？それともこっちイイ？ww」

「あ、このっ…やめ、ああっ…!!!」

仁王立ちのまま二つの穴を器用に犯され、足ががくつく。

「ほらほら、膝を付いたらダメイよ？」

「くっ、あつ」

「死ぬほど悶えるがいいイイ～っ♪」

ちゅぽちゅぶちゅぽちゅぽ…とくくとくくとく…

「あ、ああっ、あぐっ、うああんっ…!!!」

スピードモードの隙を突かれた女スパイは、

仁王立ちのまま延々と辱められる。

# STAGE-III 戦闘員



リアは無限に現れる戦闘員を一掃しようと最強フォームに変身したが、隙を突かれ、膣の中に怪しげな機械を仕込まれてしまった。

「ククク、随分歩きにくそうだなあ侵入者さん。」

スイッチを押されるたびに、何かに膣内を揉まれ、子宮の奥が熱くなる。

「くっっ…！何を仕込んだっ…!!」

「へへ、このボタンを押せば中の『虫』が活動して、濃ゆ〜い媚薬を注入しながら患部をじくじく刺激してくれるわけよ。」

「さ、最低…っ！こんなおもちゃなんか…っ!!」

淫具を取り出そうと膣内に指を入れ、探るも、空振りするだけで隊員たちに自慰行為を晒してしまう結果となる。

くちゅっ、くちゅくちゅっ…

「んっ、あつ、んうっ…!!」

「くく、お前今自分が何してるかわかってる？ww」

「ひひっ、いつもそうやってんのかあ？ww」

「あつ…!!な、違あつ…!!」

「そうそう、下手に弄くって媚薬が全部漏れたら、お前どうかしまっぜ？」

「くっっ…!!ならそのスイッチをうごぼうだけ…!!」

「ほら、おいでおいで〜。あんよが上手、あんよが上手ww」





最強フォームが股間を押さえ、内股でよちよちと歩く姿は滑稽であった。

「く…っ!!馬鹿にしてっ…!!んっつ、ぐうっ…!!」

最強装備を纏っていたとしても、胎内からの攻撃には抗えない。

「どうした～?感じるたびにおっぱいが揺れてるぞ～ww」

「感じてかんじゃうと光が強くなって…ソソるねえ～『アルティメットモード(笑)』」

周りの隊員たちは無様なリアを見てギンギンに股間を膨らませている。

(み、認めない…!私が、こんな奴らなんか…!!)

エリートスパイとして生きてきたリアは、最強フォームでの

敗北など認めるわけにはいかなかった。それも下っ端の戦闘員ごときに…。

「くっ、うっだぐっ…!!」

(だ、だめ、ここは一旦電波の届かない距離まで引かなきゃ…!!)